

海洋、その先の未来へ



年次報告書 令和6年度実績
ANNUAL REPORT 2024

CONTENTS

学長挨拶	01
ビジョン 2040	02
DATA で見る東京海洋大学	03

令和6年度のトピックス

教育・学生支援	05
研究・産学連携	07
国際交流	10
社会貢献	11

財務に関する報告

財務報告書	13
基金・校友会	19



海洋、その先の未来へ



国立大学法人東京海洋大学長
井関 俊夫

東京海洋大学は、「海を知り、海を守り、海を利用する」をモットーとして、海洋関連分野において国際的に活躍する人材を育成するために、基礎的・応用的教育研究を行っています。国立大学法人としての第4期中期目標期間も4年目に入りました。本学では、中期目標を達成するためのロードマップと、本学独自の「ビジョン 2040」を実現するためのロードマップのそれぞれについて、毎年進捗状況を確認しつつ、多種多様な努力を積み重ねています。

一方で、令和7年11月に公表された文部科学省「国立大学法人等改革基本方針」においては、国立大学法人等の全体のミッションとして、

- ①不確実な社会を切り開く世界最高水準の研究の展開とイノベーションの牽引
- ②変化する社会ニーズに応じた高度専門人材の育成
- ③地域社会を先導する人材の育成と地域産業の振興

の3点が示されました。本学においても、これまでの教育と研究を継続するだけでなく、ステークホルダーの皆様との対話等を通じて、国内唯一の海洋系大学としてのミッションを確認しつつ、国立大学法人としての機能を強化していきたいと思っています。

この年次報告では、令和6年度における具体的な実績を取りまとめています。本学の教育・学生支援、研究、国際交流、社会・地域連携、管理運営ならびに財務状況に対してご理解いただき、より一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

Vision2040

—海洋、その先の未来へ—

Beyond the Future of Marine Science and Technology



教育分野

独創的かつ実学重視の教育プログラムにより、学修成果を実感できる質の高い教育を保证するとともに、国内外の多様な組織との連携によって、インクルーシブ社会を先導する異分野融合的な総合知を備えた人材を輩出する。



研究分野

自然と調和した持続可能な社会の実現に向けて、海洋関連産業との緊密な協働により、先進科学技術を駆使したイノベーションを創出するとともに、その社会実装を推進するための研究を行う。



国際化分野

地球規模の教育・研究ネットワークを構築し、国内外のステークホルダーとの共創に適した環境を整備し、知と人材の集積拠点を実現する。



社会・地域連携分野

Society 5.0の実現と知識集約型社会への移行を踏まえ、国内外の地域共創拠点の醸成を主導し、社会変革や海洋産業の発展に貢献する。



管理運営分野

高度なユニバーシティ・ガバナンス体制を確立し、法人経営のための人材育成を計画的に行う。また、様々な財源を確保し、大学が持続的に成長する経営モデルを確立する。教職員については多彩な人材を登用し、適切な育成と業績評価によって、各人が自らの能力を存分に発揮できる職場環境を実現する。

[詳しくはこちら](#)



DATAで見る東京海洋大学

東京海洋大学は、国内唯一の海洋系大学として、「海を知り、海を守り、海を利用する」をモットーに教育研究を展開しています。本学の基本情報や活動状況を数字で紹介します。

基本情報

● キャンパス数等

2 キャンパス (288,108㎡)
5 ステーション (91,014㎡)

- ① 品川キャンパス
- ② 越中島キャンパス

- ③ 吉田ステーション
- ④ 大泉ステーション
- ⑤ 館山ステーション
- ⑥ 富浦ステーション
- ⑦ 清水ステーション



● 学部・研究科(大学院)・専攻科数

3 学部

- 海洋生命科学部
- 海洋工学部
- 海洋資源環境学部

1 研究科

- 海洋科学技術研究科

2 専攻科

- 海洋科学専攻科
- 乗船実習科

● 教職員数



教員 **238** 人
うち女性 **35** 人 (14.7%)

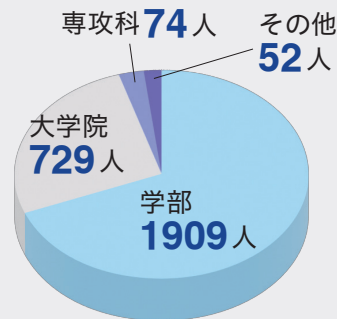


職員 **235** 人
(事務系 146 人、技術系 86 人、URA3 人)
うち女性 **91** 人 (38.7%)

● 学生数

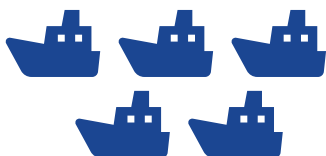
2,764 人

うち女子学生 **914** 人 (33.1%)



設備・学術資源

● 練習船等保有数



練習船等保有数 **5** 隻
大学・大学校の中では **最多**

● 図書館蔵書数



図書 **487,333** 冊
雑誌 **12,777** 種

● ミュージアム



ミュージアム **2** 施設
収蔵資料数 **29,579** 点
文化財 **4** 件
うち国の重要文化財 **1** 件(明治丸)

教育分野

● TOEIC スコア

海洋生命科学部、
海洋資源環境学部4年生

600点以上取得者の割合



100%

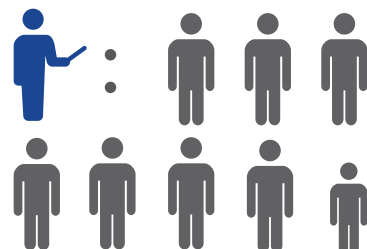
● 就職率

就職希望者の就職率



94.2%

● 教員一人当たり学生数(学部)

教員1名に対して
学生約7.9名

少人数教育による丁寧な指導

※全86国立大学平均 9.1人

● 学生寮の数



2つ(朋鷹寮、海王寮)計558室

関東以外からの学部新入生

171人

研究分野

● 共同研究受入件数

156件/年

教員一人当たり0.66件
(全86国立大学中11位)

● 受託研究受入件数

66件/年

教員一人当たり0.28件
(全86国立大学中30位)

● 特許保有件数



205件

教員一人当たり0.86件
(全86国立大学中17位)

国際化分野

● 国際交流協定数

94機関

30か国・地域

● 留学生数



198人

留学生出身国26か国・地域
うち大学院170人

社会・地域連携分野

● 連携協定

28機関

自治体4、民間企業等6、
大学等研究機関18

● 海外派遣学生数



103人/年

● 留学生比率



大学院

22.5%

(大学院生の約4.5人に1人が留学生)

● 高大連携協定校



8校

※データの基準日は令和6年5月1日又は令和6年度中の実績(研究分野のみ令和5年度実績)

[詳しくはこちら](#)

令和6年度 TOPICS

1. 教育・学生支援

教育トピックス

●卓越大学院プログラムの教育活動

学位プログラムの開設

卓越大学院プログラムの大学院改革の集大成として、令和6年度から「海洋 AI・データサイエンス学位プログラム」を開設しました。全専攻横断型組織として学位プログラム運営本部を設置し、運営しています。

卓越大学院プログラム初の修了生輩出

卓越大学院プログラムでは、令和6年度に海洋 AI・データサイエンス学位プログラム（卓越大学院プログラム）の第1号の修了生を輩出しました。第1号修了生は、社会人入学を経て本プログラムに参加した学生で、修了後も所属先機関に戻り第一線の研究者として活躍しています。

ディプロマ・サプリメントの発行

第1号修了生の輩出に合わせて、学位プログラムにおける学修成果の可視化と質保証を目的として、「ディプロマ・サプリメント」を発行しました。従来の成績証明書等の評価に加え、個々の学生の具体的な学習の到達度や達成状況を示すことで、修了時の学修成果を客観的に提示することで、学位の社会的通用性を高めることができます。

サマーリサーチプログラムの開催

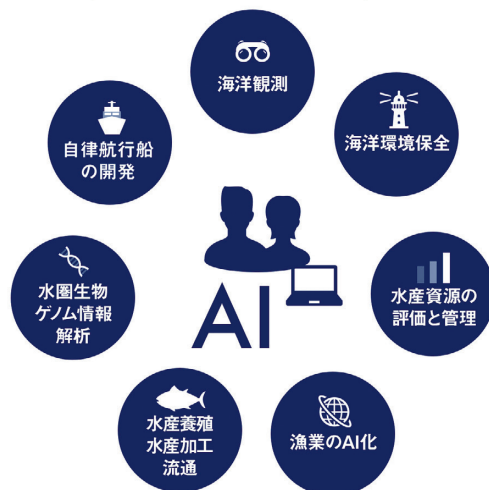
入学前から大学院へ繋ぐシームレスな一貫教育体制を構築することを目的として、サマーリサーチプログラムを開催しました。従来、他大学の学生を含む研究室配属前の学部2年次以上の学生を対象としていましたが、令和6年度より社会人も対象に加え、海洋 AI コンソーシアム参画機関を中心として参加があり、盛会のうちに終了することができました。

海洋分野への AI 適用についてはリスキリングとしての需要も高く、今後も魅力的なプログラムを提供してまいります。

海洋 AI マッチング Week 開催

卓越大学院プログラム履修学生と海洋 AI コンソーシアムの参画企業・機関がインターンシップやレジデントシップのマッチングを通じて、将来的なキャリアパスにつながるような長期の関係を築く機会として実施しています。インターンシップに進んだ学生からは、貴重な経験・知見を得ているとともに、将来のキャリアパスのイメージが具体的にになってきたとの声も聞かれました。受入企業からの学生の成果への評価も高く、インターンシップ修了後も継続的な交流が期待されています。

Marine AI Innovator



集中講義の様子

詳しくはこちら



教育トピックス

●4 学期制・105 分授業導入

本学では、令和6年4月から、4学期制・105分授業を全学的に導入しました。約2年間をかけてカリキュラムの見直しと時間割の検討を行い、多くの教職員の緻密な準備作業を経て、無事にスタートを切ることができました。この改革により、夏季休業期間を以前より長く確保し、学外学修（海外留学、中長期インターンシップ、ボランティア活動、サマースクールなど）の充実や、拡大した授業時間を用いたアクティブ・ラーニングの導入など、多様な授業展開が可能となりました。これらに加え、学修成果並びに教育成果の可視化への取組を進め、学修成果を重視した学修者本位の教育への転換を図る予定であります。

[詳しくはこちら](#)


●就職支援実績一覧

タイトル	実施日・実施期間等	参加人数	相手先・対象者等
海洋大生と企業との交流会（オンライン形式）の実施	R7.1.8～R7.1.10	242人 (延べ人数)	参加企業数:79社
個別企業研究会(オンライン形式)の実施	44回	372人 (延べ人数)	参加企業数:44社
就職ガイダンス(オンライン形式)の実施	48回	1734人 (延べ人数)	本学全学生
留学生向け就職ガイダンス(英語対応)の実施	6/20、10/17、2/7	42人	本学留学生
就活ワークショップ(就活の基礎知識から模擬面接まで、多様なプログラム)の実施	9日間 (5/22、5/28、6/11、6/18、 7/11、7/17、10/30、 11/14、12/25)・20回	65人 (延べ人数)	学部3年生・博士前期課程1年生を中心に R8年3月卒業修了予定学生
就活に役立つ四季報・業界地図・SPI等の試験問題集の閲覧・貸出	通年	58人 (貸出のみ)	本学全学生
キャリア相談(就職相談)の実施	通年	856人 (延べ人数)	学部3年生・博士前期・後期課程1年生を中心に 卒業後3年以内の卒業生を含む全学生
海洋大キャリアナビ(本学就職支援サイト)の活用	通年(令和5年度より導入)	全学生 (正規生のみ)	全学生(正規生のみ)がスマホから、求人票・ インターンシップの閲覧、進路決定届の提出、 キャリア相談・セミナー予約ができる。

[詳しくはこちら](#)


2. 研究・産学連携

研究トピックス

●タイ原産の魚介類を世界の台所に！国際共同研究が創る持続的な養殖生産

(海洋生物資源学部門 教授 廣野育生)

廣野教授を中心とした研究グループでは、1999 年日本学術振興会 (JSPS) の拠点大学交流事業を契機に、アジア研究教育拠点事業、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) 事業を通して、タイとの研究交流を深めてきました。2018 年度から、東京海洋大学とタイ水産局を中心としたコンソーシアムにより SATREPS 事業「世界戦略魚の作出を目指したタイ原産魚介類の家魚化と養魚法の構築 (通称: Thai Fish Project)」を開始しました。

本事業は、タイ在来種であるアジアズキ (Asian seabass: *Lates calcarifer*) とバナナエビ (banana shrimp: *Penaeus merguensis*) を国際市場での主要水産物として扱われる養殖種とする (家魚化) ため、有用形質を選抜するためのゲノム育種を進めるとともに、感染症防除法、栄養強化餌、および、エビの全雌生産技術を開発し、さらに、多様な遺伝資源を永久保存する技術も並行して開発することで、いつでも再生産が可能となる養殖生産技術開発を行うことを目的としています。

この中で、研究題目 3:「効率性の高い養成技術の確立」では、芳賀穰教授、Pitchaya CHAINARK 研究員及び Montakan TAMTIN 研究員をリーダーとして、アジアズキの DHA 強化エサを開発し、この飼料を用いて養殖場でアジアズキの試験生産を行い、DHA 含有量を増やしたアジアズキの生産を実現しました。2025 年 3 月 18 日には、タイの首都バンコクで水産会社の関係者などを招いた最終報告会が開催され、新技術で養殖されたタイの在来種のアジアズキと、バナナエビの試食会が行われました。最終報告会には日本とタイの研究機関や企業など、約 200 名もの参加者が集まり、注目度の高さが伺えました。令和 7 年度以降は、JICA Post-SATREPS 事業「Thai Fishrimp Project」が開始され、引き続き本格的な社会実装を目指し、研究開発等を進めていく予定です。



タイ・バンコクで行われた最終報告会

【SATREPS 事業概要】

事業名	世界戦略魚の作出を目指したタイ原産魚介類の家魚化と養魚法の構築
相手国	タイ王国
国内研究機関	東京海洋大学、国際農林水産業研究センター、水産研究教育機構、神奈川大学、三重県栽培漁業センター
相手国研究機関	タイ王国農業・協同組合省水産局、タイ科学技術省国立科学技術開発庁遺伝子生命工学研究センター、カセサート大学、チュラロンコン大学、ワライラック大学、スラナリー工科大学、プリンスオブソンクラ大学
採択年度	2018 年度～2025 年度



最終報告会で提供された、アジアズキおよびバナナエビ料理

詳しくはこちら



研究トピックス

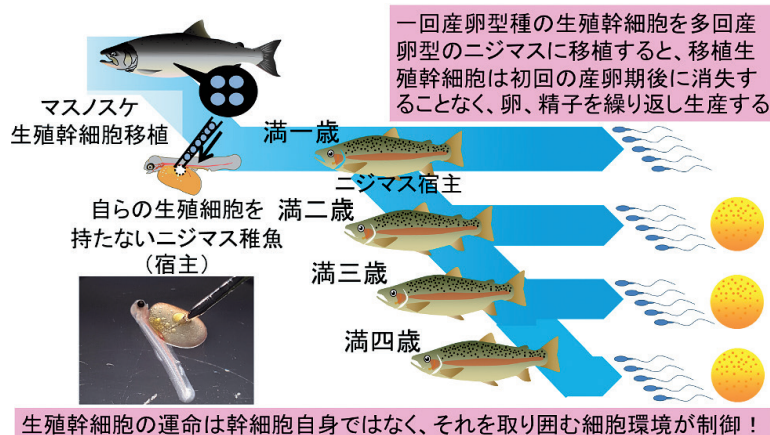
●サケの卵を何度も生産するニジマスの作出に成功(令和6年度プレスリリースより)

(海洋生物資源学部門 教授 吉崎悟朗)

太平洋のサケ類の多くは海での回遊生活の後、母川に戻り産卵を終えると雌雄ともに斃死します。一方、太平洋に分布する原始的なサケと考えられているニジマスやカットスロートは産卵後も生き残り、その後も毎年産卵を繰り返します。

吉崎悟朗教授らの研究グループは、一回産卵型の代表としてマスノスケ(キングサーモン)とヒメマス(ベニザケの淡水型)を、多回産卵型の代表としてニジマスを用い、これらの種の卵巣や精巣内に存在する生殖幹細胞の挙動を解析しました。その結果、サケ類の卵や精子のもとになる生殖幹細胞は初回成熟前には枯渇するため、これらの種では卵や精子は生涯に一度しか生産できないことが分かりました。しかし、これらの種の生殖幹細胞をニジマスに移植すると、サケ類の生殖幹細胞はニジマス型に変化しました。すなわち、初回成熟後も枯渇することなくニジマスの卵巣や精巣内で生残り、卵形成や精子形成を継続、最終的には機能的な卵や精子を生産しうることを明らかにしました。また、これらの卵や精子を受精させることでニジマス代理親から健全なキングサーモンやベニザケの次世代を生産することができました。

本技術はこれらの高級なサケ類の養殖生産の効率化に貢献するのみならず、その品種改良も大きく加速させることが期待されます。また、本技術の活用により地球温暖化に伴い資源量が減少している多くの一回産卵型のサケ類の遺伝子資源の長期保存も可能になります。



ニジマス代理親魚から生まれたキングサーモン

詳しくはこちら



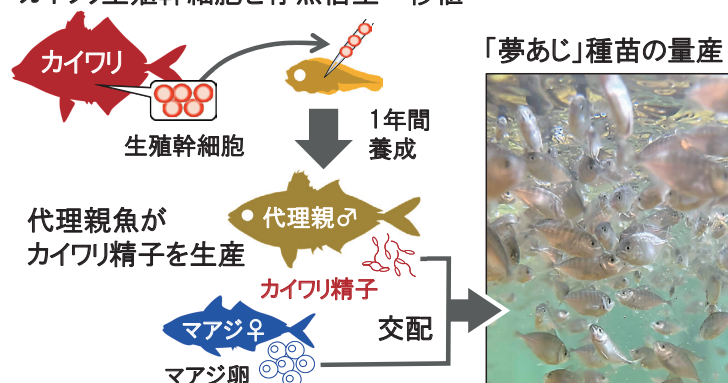
産学連携トピックス

●大学発ベンチャーと挑戦! 先端技術を利用して、美味しくて新しい魚を社会に届ける

(水圏生物生産工学研究所 准教授 森田哲朗)

森田准教授は、令和4年度生研支援センター「スタートアップ総合支援プログラム(SBIR 支援)」の採択を受け、「生殖幹細胞操作技術を駆使した世界唯一の養殖魚「カイジ」の創出」の研究を開始、翌年にマアジと希少魚カイワリのハイブリッドである新魚種「カイジ」の作出に成功しました。本事業内での経営者候補とのマッチングがきっかけとなり、令和5年7月には株式会社さかなドリームを共同創業し、翌年6月には東京海洋大学発ベンチャーの認定を受けました。森田准教授は株式会社さかなドリームの最高技術責任者(CTO)を兼務し、「カイジ」から名称変更した「夢あじ」の量産化に取り組みました。本事業の核となるのは、本学が長い年月をかけて構築してきた、代理親魚技法を中心とする魚類の生殖幹細胞操作技術です。本技術により、希少魚カイワリの配偶子の安定供給を初めて実現し、「夢あじ」の量産が技術的に可能となりました。令和6年12月には「夢あじ」の市場販売を実現し、本技術を用いた新たな養殖魚開発にも着手しています。

カイワリ生殖幹細胞を仔魚宿主へ移植



産学連携トピックス

●産学連携成果:ゼロエミッション船が拓く、船舶の未来

(大出剛特任教授)

水素は船舶におけるゼロエミッション燃料として代表的な代替エネルギーであり、水素燃料電池船の普及は環境問題に大きく貢献できると期待されています。

東京海洋大学では、2010 年より電池推進船の研究を開始し、2016 年より水素燃料電池船の社会実装に向けた研究開発を進めてきました。大出特任教授を中心とした研究グループは、NEDO 事業「燃料電池等利用の飛躍的拡大に向けた共通課題解決型産学官連携研究 開発事業 / 燃料電池の多用途活用実現技術開発」、「商用運航の実現を可能とする水素燃料電池船とエネルギー供給システムの開発・実証」採択事業（事業代表者：岩谷産業株式会社）において、これまでに得られた知見を基に研究開発を進めてきました。研究成果の集大成となる、水素燃料電池を搭載した本学の実験船「らいちょう N」は、国土交通省策定の「水素燃料電池船の安全ガイドライン」（2021 年 8 月改訂）を遵守した上で、水素燃料電池とリチウムイオン 2 次電池だけで運航できるハイブリット制御による純水素燃料電池船として、初めて船舶検査証書の交付を受けました。本証書の交付は、開発した水素燃料電池船が安全に建造・運航できることを示しており、2025 年大阪・関西万博で運航した水素燃料電池船「まほろば」の建造・運航にはこれらの成果が反映されています。水素燃料電池船の普及に大きく貢献することが期待できます。



本学の実験船「らいちょう N」



水素燃料電池船「まほろば」

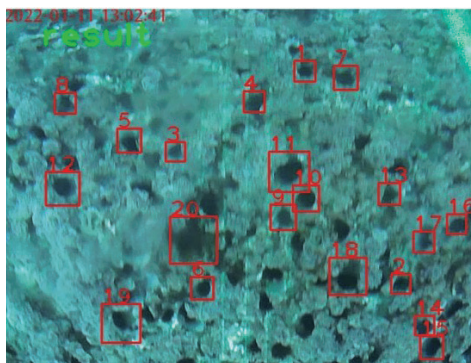
産学連携トピックス

●海を縦横無尽に走るロボット μ -ASV、海中マッピングで見えてくる海のひみつ

(海洋電子機械工学部門 教授 田原淳一郎)

水産業や海洋土木等の海洋関連産業では、急速に進行する少子高齢化等を背景に、海域調査・作業の無人化ニーズが高まると同時に、多様な用途に応える機能が求められています。

田原教授は、水中ロボットに関する技術を活用し、株式会社マリン・ワーク・ジャパンと国交省令和 3 年度海の次世代モビリティの利活用に関する実証事業を実施し、小型 Autonomous Surface Vehicle (ASV) を用いたウニ密度マップによる効率的な駆除方法の検討を行いました。本事業成果から、さらに開発を進め、令和 5 年に GNSS（全球測位衛星システム）を用いて、任意の設定したコースに沿って自律航行が可能な自律型無人ボート ASV を開発しました。この ASV (μ -ASV) は、水中カメラやサイドスキャンソナーなどの観測機器を搭載して、自律航行・定点保持をしながら様々なデータを収集します。取得したデータは、海底地形や水中生物分布マップ等の作成に利用することができます。将来的には、海底地形マップの作成や、ウニ等底生生物の生息状況の確認などが可能になることが期待されます。



画像認識によるウニの識別

 μ -ASVシステム

3. 国際交流

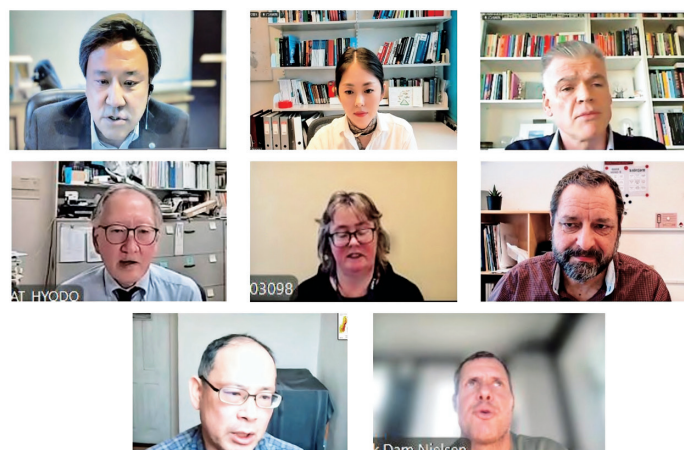
国際交流トピックス

●令和6年度「大学の世界展開力強化事業～EU諸国等との大学間交流形成支援～」に本学申請事業「METIS」が採択されました

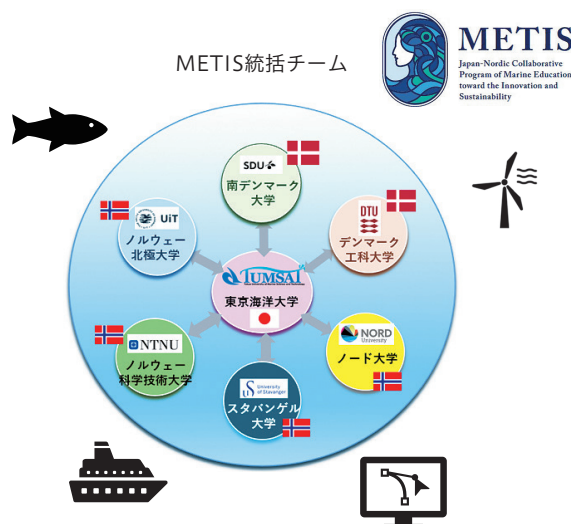
本学の申請事業「日・北欧連携国際協働教育「海洋の未来を創造する高度専門技術者」養成プログラムー Japan-Nordic Collaborative Program of Marine Education toward the Innovation and Sustainability (METIS) ー」が令和6年度「大学の世界展開力強化事業～EU諸国等との大学間交流形成支援～」に採択されました。

METISは北欧（デンマーク及びノルウェー）の6大学と行う、大学院生を対象としたプログラムで、7大学合同で行うアクティブラーニングによる分野横断型オンライン合同授業、実渡航による修士段階での単位互換プログラムおよび博士後期課程段階での研究プロジェクト型/就業体験型インターンシップで構成されています。分野横断型オンライン合同授業修了者には電子学修歴証明書を発行します。また、ラーニングアグリーメントに基づく単位互換など質保証を伴うプログラムの構築に取り組んでいます。

METISを通じて、本学はデンマーク、ノルウェーの大学とともに、海洋産業の生産性向上と活性化、海洋を巡る地球規模の諸課題解決に資するグローバルに活躍する高度専門技術者の育成を進めます。



7大学合同METIS統括チームミーティングの様子(2025年2月12日実施)



詳しくはこちら



●国際交流事業・成果一覧

タイトル	実施日・実施期間	参加人数	相手先・対象者
台湾大学工学院との国際交流協定の新規締結	2024/7/9		台湾大学工学院院长
上海海洋大学との合同シンポジウムの開催	2024/10/29	47名	上海海洋大学及び本学の教職員及び学生
第27回OQEANOUS Plus協議会	2024/11/25	本学含むコンソーシアム校教員19名	OQEANOUS Plus コンソーシアム校教職員
OQEANOUS Plus Faculty Exchange 2024	2024/11/25-26	学内(発表者等):16名、コンソーシアム校:15名、聴講者:19名	OQEANOUS Plus コンソーシアム校(教職員)、本学学生等
南デンマーク大学理学部生物学科との国際交流協定及び学生交流に関する覚書の新規締結	2024/11/29		南デンマーク大学理学部生物学科長
2024年度国際交流懇談会の開催	2024/12/6	約120名	留学生
OQEANOUS Plus プログラム説明会並びに教員交流会	2024/12/20	本学:教職員4名 カセサート大学:教職員9名、学生20名	タイ・カセサート大学(学生・教職員)
オンライン学生交流会(OEP)	2025/3/21	本学含むコンソーシアム校学生:26名	OQEANOUS Plus コンソーシアム校(学生)

4. 社会貢献

社会貢献トピックス

●明治丸150年シンポジウム・特別展示

第20回明治丸シンポジウム「明治丸150年の航跡 - 明治丸の生い立ちと活躍、そして修復」

明治政府が灯台巡回船として英国グラスゴーの造船所に発注し、1874(明治7)年に竣工した明治丸は、同時に明治天皇は政府高官などが乗船するためのロイヤルシップとしての役割を担った船です。

その功績は、明治天皇巡幸、小笠原諸島の領土問題、海底ケーブルの敷設など多岐にわたり、これらが日本近代化の礎となったものです。

1975(昭和53)年には、日本で唯一残る鉄船として「重要文化財」として指定を受けるなど、貴重な造船技術の伝承にも寄与しています。

その明治丸は、2024(令和6)年に竣工150周年を迎え、今も優美な姿を見せています。

この年に開催した「明治丸シンポジウム」においては、「明治丸150年の航跡 - 明治丸の生い立ちと活躍、そして修復」をテーマに、その歴史、様々な功績を振り返るとともに、将来に向けて、どのように明治丸を維持、活用していくかについて、各分野の専門家に講演いただき、一般の方々に広く知っていただく機会となりました。



詳しくはこちら



●「海の日」記念行事

一般の皆様へ海に親しみ・興味を持っていただくため、7月15日の海の日「海の日」記念行事を開催しました。当日は、海の日制定の由来となった重要文化財「明治丸」に関するシンポジウムや、プラネタリウム上映会、工作教室、ポスター展示、研究室公開、マリンサイエンスミュージアム特別公開等、本学の教職員や学生による様々なプログラムが実施されました。

越中島キャンパス 989 名、品川キャンパス 438 名、合計 1,427 名の方々に来場いただきました。



詳しくはこちら



社会貢献トピックス

●練習船「海鷹丸(うみたかまる)」の気仙沼港での一般公開・北里洋先生による講演会と海鷹丸一等航海士によるロープワーク体験

2024年8月2日(金)、海鷹丸の一般公開が気仙沼商港岸壁で実施され、市民ら約800名が来場しました。海鷹丸の気仙沼寄港は2018年以来6年ぶりとなり、多くの見学者でにぎわいました。今回の一般公開は、地域と大学との連携を深め、海洋・水産業に対する理解を促進することを目的として開催されたものです。今回は3年生28名の学生が乗船漁業実習中に、気仙沼への寄港となりました。

当日は、乗組員および学生による案内のもと、船内の居住区や操舵室、観測機器などが公開されました。来場者は実際に航海計器や船内設備に触れ、普段目にする機会の少ない調査練習船の内部構造や機能を間近で体験しました。特に操舵室では、航海中に使用される機器の解説が行われ、参加者からは「貴重な体験だった」「海の仕事に興味を持つきっかけになった」といった声も寄せられました。

また、同日には特別企画として、北里洋客員教授による講演会と、海鷹丸一等航海士によるロープワーク体験も開催されました。講演会のテーマは「三陸から拓かれた超深海の世界 ― パチスカーフ、Ring of Fire 2022 Japan Expedition、そしてこれから ―」で、参加者は約60名でした。講演では、三陸沖の深海研究を軸に、過去の深海探査プロジェクトや国際共同研究の成果、さらに今後の展望について、わかりやすく解説が行われました。参加者は熱心に耳を傾け、講演後には活発な質疑応答も行われ、深海探査や海洋研究への関心の高さがうかがえました。

一方、ロープワーク体験では、海鷹丸の一等航海士が実演を交えながら基本的な結索技術を紹介し、参加者が実際にロープを使って船上で行われる作業を体験しました。子どもから大人まで多くの参加者が楽しみながら学び、海事技術への理解を深める貴重な機会となりました。

この取り組みは、東京海洋大学が地域との連携を強化し、海洋教育の推進および次世代の人材育成を目指す活動の一環です。三陸地域、気仙沼市において、海洋への関心を広げるとともに、地域住民との交流を深める重要な機会となりました。東京海洋大学三陸サテライトでは、今後もこうした地域連携事業を継続し、教育・研究・地域貢献を有機的に結びつけながら、持続可能な海洋社会の形成に寄与していく予定です。


[詳しくはこちら](#)


●気仙沼市・東京海洋大学連携事業「海と生きる水産セミナー」実施一覧

タイトル	実施日・実施期間	参加人数	相手先・対象者
「海と生きる」連続水産セミナー 10th シーズン第3回	令和6年4月17日(水)	76名	漁業者・水産関連事業従事者等
「海と生きる」連続水産セミナー 10th シーズン第4回	令和6年5月28日(火)	90名	
「海と生きる」連続水産セミナー 11th シーズン第1回	令和7年2月10日(月)	71名	
「海と生きる」連続水産セミナー 11th シーズン第2回	令和7年3月25日(火)	93名	

財務報告書

1. 令和6事業年度決算について

貸借対照表

貸借対照表は、国立大学法人の財政状況について貸借対照表日（期末日）におけるすべての資産、負債及び純資産（資本）を示しています。

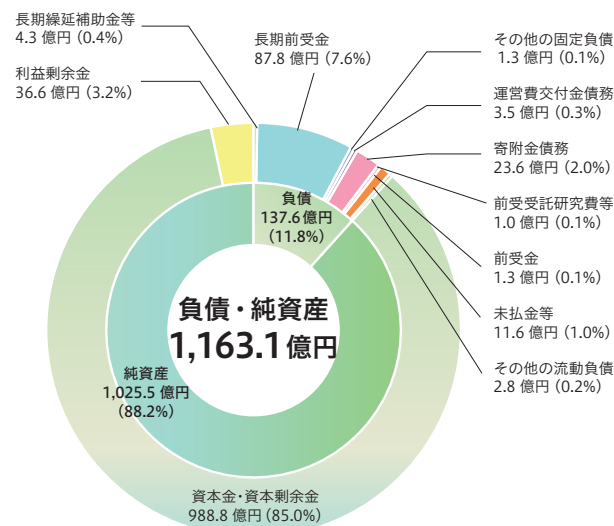
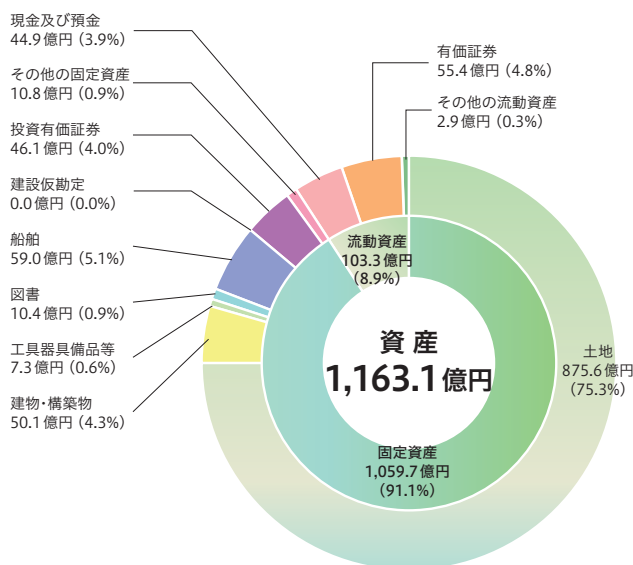
（単位：百万円）

	令和5年度	令和6年度	前年度比
資産	117,429	116,316	△ 1,113
固定資産	108,127	105,976	△ 2,150
土地	87,569	87,569	-
建物・構築物	4,935	5,013	78
工具器具備品・機械装置	854	738	△ 115
図書	1,043	1,044	0
船舶	6,850	5,901	△ 949
建設仮勘定	1	1	-
投資有価証券	5,782	4,618	△ 1,164
その他の固定資産	1,090	1,089	△ 1
流動資産	9,302	10,339	1,037
現金及び預金	8,980	4,492	△ 4,488
有価証券	-	5,548	5,548
その他の流動資産	321	299	△ 22

（単位：百万円）

	令和5年度	令和6年度	前年度比
負債	14,269	13,760	△ 509
固定負債	9,691	9,358	△ 333
長期繰延補助金等	562	435	△ 126
長期前受金	8,910	8,787	△ 123
その他の固定負債	218	135	△ 83
流動負債	4,577	4,402	△ 175
運営費交付金債務	465	350	△ 115
寄附金債務	2,191	2,363	172
前受受託研究費等	123	106	△ 17
前受金	137	135	△ 1
未払金・未払消費税等	1,475	1,164	△ 311
その他の流動負債	183	281	97
純資産	103,160	102,556	△ 604
資本金	104,406	104,406	-
資本剰余金	△ 4,689	△ 5,517	△ 827
利益剰余金	3,443	3,667	223

（注）百万円未満を切捨てているため、合計額が一致しない場合があります。



●貸借対照表の概要(令和6事業年度)

資産については、前年度比 1,113 百万円減の 116,316 百万円となっています。主な減少要因としては、工具器具備品及び船舶について、新規取得よりも減価償却による減少が上回ったこと等が挙げられます。なお、現金及び預金の減少は、土地の有効活用事業による権利金等を活用して投資有価証券を購入したことによるものであり、投資有価証券のうち一年以内に償還予定のものについては、流動資産の有価証券に振替えられています。

負債については、前年度比 509 百万円減の 13,760 百万円となっています。主な減少要因としては、前年度竣工の実習艇ひよどりの建造代金支払い等により未払金が減少したこと等が挙げられます。純資産については、前年度比 604 百万円減の 102,556 百万円となっています。主な減少要因としては、資本剰余金について固定資産の新規取得による増加よりも減価償却による減少が上回ったこと等が挙げられます。

損益計算書

損益計算書は一会計期間における国立大学法人の運営状況について示しています。国立大学法人会計基準等による会計処理によって作成されたものであるため、企業会計における経営成績を示したものと異なります。

(単位:百万円)

	令和5年度	令和6年度	前年度比
経常費用	8,756	9,183	426
教育経費	1,360	1,565	205
研究経費	481	555	74
教育研究支援経費	479	605	126
受託研究費	457	403	△ 54
共同研究費	182	189	7
受託事業費	65	70	5
人件費	5,385	5,436	50
一般管理費	341	351	10
財務費用・雑損	2	4	1
臨時損失	0	0	0

(単位:百万円)

	令和5年度	令和6年度	前年度比
経常収益	9,009	9,408	398
運営費交付金収益	5,399	5,712	313
学生納付金収益	1,639	1,628	△ 11
受託研究収益	553	512	△ 40
共同研究収益	254	256	2
受託事業収益	67	74	6
寄附金収益	301	274	△ 26
施設費収益	78	85	7
補助金等収益	278	409	131
財務収益	22	29	6
財産貸付料収入	251	269	18
その他の収益	162	154	△ 8
臨時利益	0	0	0
目的積立金取崩額	-	51	51
前中期目標期間繰越積立金取崩額	59	106	47
当期総利益	312	383	70

(注)百万円未満を切捨てているため、合計額が一致しない場合があります。

●損益計算書の概要(令和6事業年度)

経常費用については、前年度比 426 百万円増の 9,183 百万円となっています。主な増加要因としては、練習船海鷹丸の油圧クレーン更新等により教育経費が増加したこと、館山ステーションの実験研究棟改修等により教育研究支援経費が増加したこと等が挙げられます。

経常収益については、前年度比 398 百万円増の 9,408 百万円となっています。主な増加要因としては、過年度から令和6事業年度に繰越した運営費交付金の研究プロジェクトの業務達成に伴い、運営費交付金収益が増加したこと、補助金等収益が増加したこと等が挙げられます。

上記の経常損益に加え、目的積立金・前中期目標期間繰越積立金の取崩額が前年度比 98 百万円増の 157 百万円となったことにより、当期総利益は前年度比 70 百万円増の 383 百万円となっています。

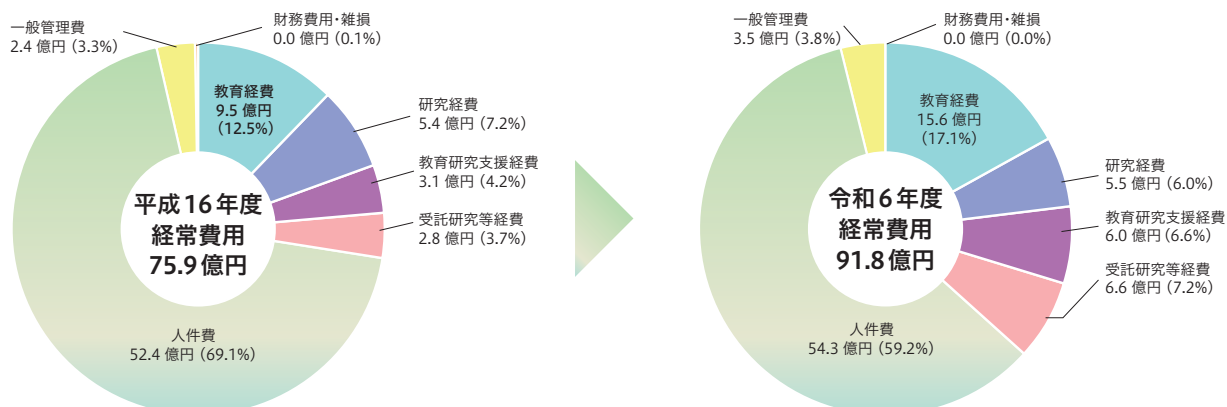
財務情報については、下記ホームページに掲載しています。

<https://www.kaiyodai.ac.jp/overview/docs/post-8.html>



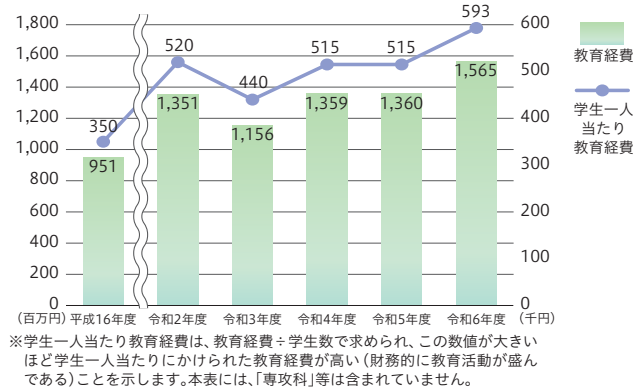
●経常費用の構成比の推移

法人化直後に比べ、主に教育経費、教育研究支援経費、受託研究等経費の割合が増加しています。

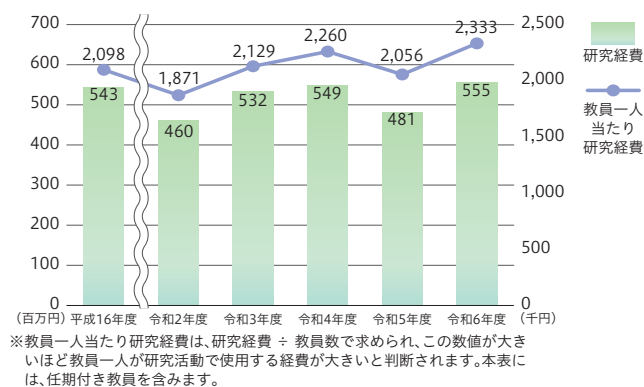


●各経費の推移

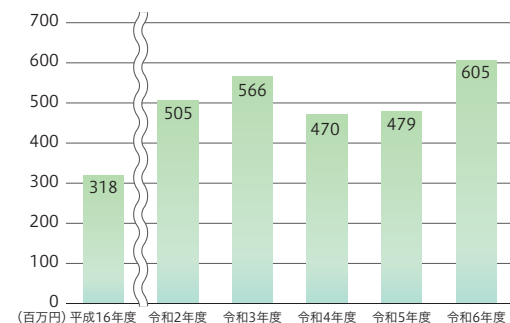
教育経費及び学生一人当たりの教育経費



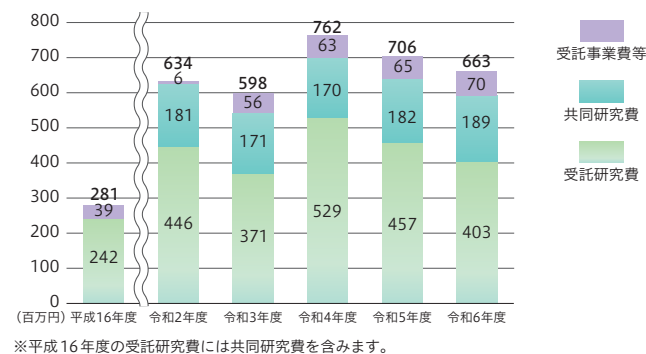
研究経費及び教員一人当たりの研究経費



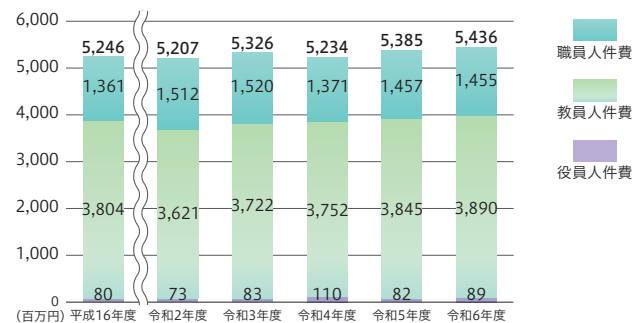
教育研究支援経費



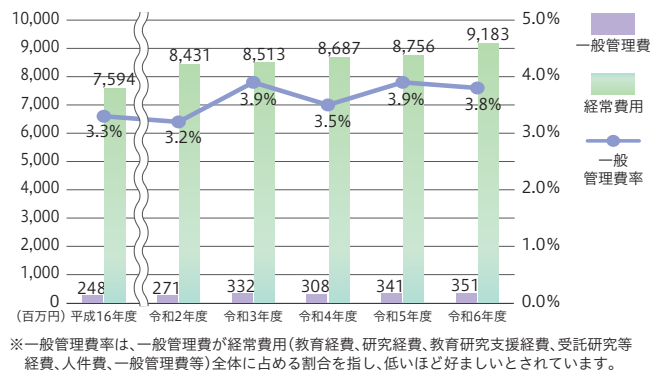
受託研究等経費



人件費

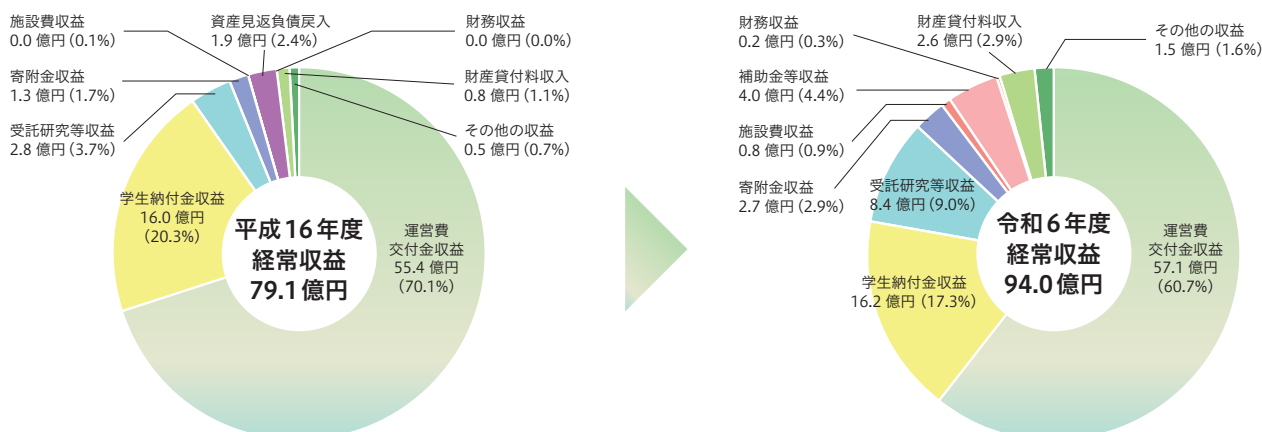


一般管理費及び一般管理費率



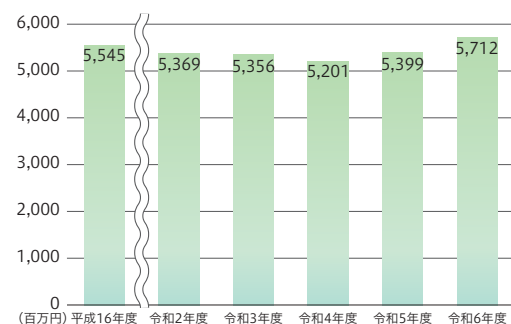
●経常収益の構成比の推移

法人化直後に比べ、運営費交付金収益の割合が減少し、受託研究等収益の割合が増加しています。

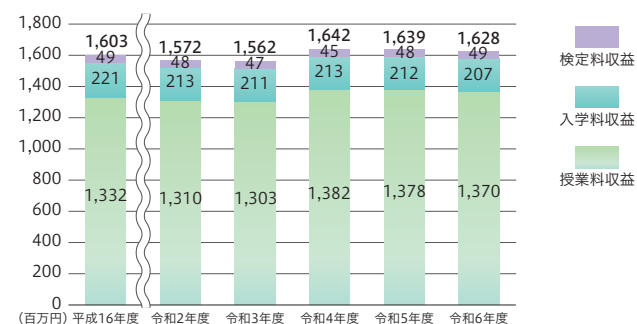


●各収益の推移

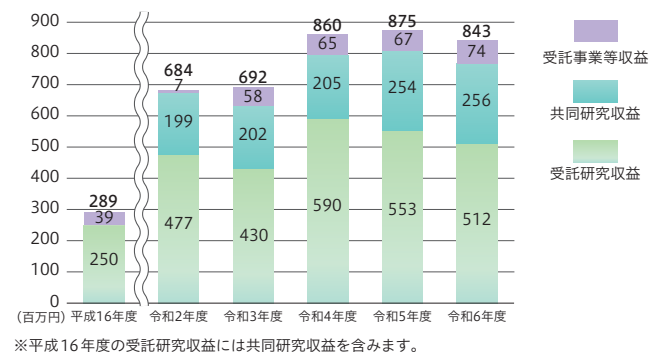
運営費交付金収益



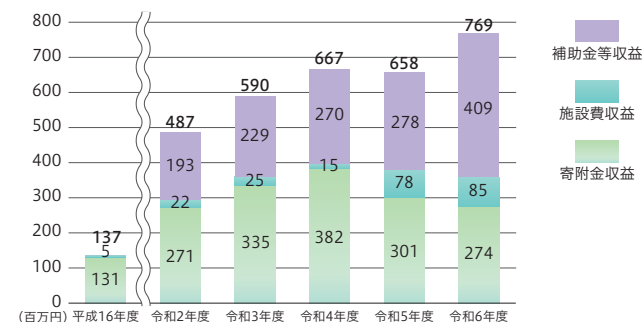
学生納付金収益



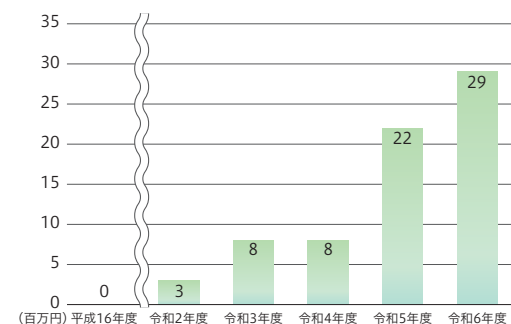
受託研究等収益



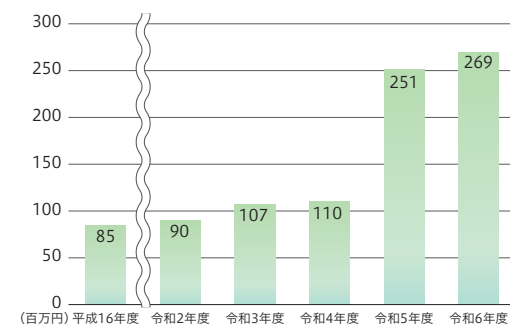
寄附金/施設費/補助金等収益



財務収益(有価証券利息等)



財産貸付料収入



2. 教育研究環境の整備状況

本学では、キャンパスマスタープランや設備マスタープラン等の実行・見直しを行い、教育研究環境の整備・充実に取り組んでいます。

令和6事業年度では、館山ステーションの実験研究棟の改修や練習船海鷹丸のクレーン更新等を行いました。

(館山)実験研究棟改修



練習船海鷹丸クレーン更新



教育研究等の発展・充実のためには、既存の施設・設備等の更新や新設が不可欠となりますが、下のグラフのとおり老朽化が進んでおり、限られた予算の中で十分に実施できていない状況です。国内唯一の海洋系大学として、社会からの要請に応えるべく教育研究等の発展・充実に努めておりますが、教育研究環境の整備・充実に皆様の温かいご支援を賜ることができれば幸いです。

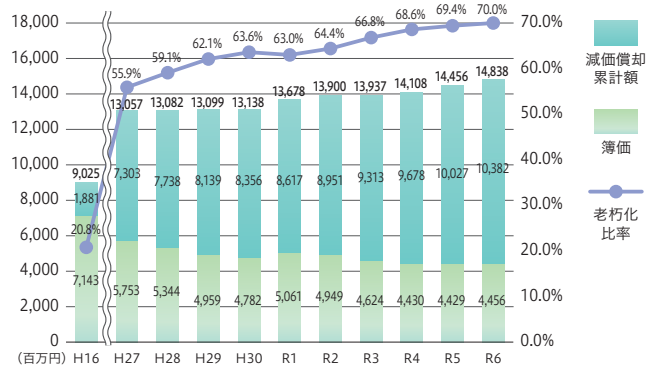
東京海洋大学基金については、右記ホームページに掲載しています。 <https://www.kaiyodai.ac.jp/kikin/>



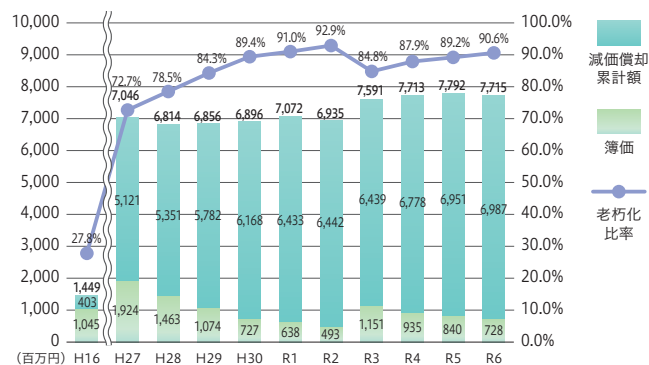
●大学施設等の老朽化比率の推移

※老朽化比率＝減価償却累計額÷(簿価＋減価償却累計額)

建物



工具器具備品



【土地有効活用及び新学生寮の整備等】

本学が保有する資産の有効活用を図るため、国立大学法人法第33条の3に基づく土地の貸付を行い、その対価を財源として、教育研究水準の一層の向上を目的としたキャンパス整備を行っています。

「キャンパスマスタープラン2022」において掲げる「共創イノベーション・コモンズ(キャンパス全体が有機的に連携し、様々な分野や場面で、様々なプレーヤーが共創イノベーションを行っていく拠点)」の実現に向けた第一歩として、品川キャンパスの土地の一部貸付により財源を確保し、品川キャンパスの国際混住寮(青鷹寮)の整備事業を進めており、令和6年5月に着工しました。(令和8年2月完成予定)。



完成イメージ図 ※上記イメージ図は、実際と異なる場合があります。

3. 参考資料 国立大学法人の会計制度

広く皆様に本学の財務状況を理解いただくために、国立大学法人会計の独特な仕組みについてご説明いたします。(理解を容易にするため、説明は単純化しています。)

1. 国立大学法人と官庁会計、企業会計との違い

国立大学法人の会計制度は、企業会計原則を基本としながらも、国立大学という公共的な性格や特殊性を踏まえ、民間企業とは異なる独特な会計制度(国立大学法人会計基準)が採用されています。

	国立大学法人会計	官庁会計	企業会計
目的	財政状態・運営状況開示	予算とその執行状況の開示	財政状態・経営状態の開示
利害関係者	国民その他の利害関係者	国民、住民	株主、投資家、債権者等
記帳形式	複式簿記	単式簿記	複式簿記
認識基準	発生主義	現金主義	発生主義
利益の獲得	目的としない	目的としない	目的とする

2. 国立大学法人の財源(収入源)

国立大学法人は、学生からの納付金(授業料、入学料、検定料)や皆様からの寄附金などの自己収入と、国から交付される運営費交付金などで運営されています。それぞれの収入は、収入の性質に応じて会計処理されます。



※国から交付される資金は税金が財源となります。

3. 国立大学法人会計独特のしくみ

(1) 収益化の考え方

運営費交付金や授業料等は、その資金を用いて確実に業務(教育・研究)を遂行する義務を負うと解釈されることから入金時に負債計上されますが、原則として期間の進行に応じて収益に計上され、債務は消滅します。

(2) 国立大学法人の利益

計画された業務を効率よく実施したり経費削減を達成したりすること(運営努力)により費用が低減した場合、利益が発生します。

各年度において獲得した利益のうち、大学の運営努力によるものとして文部科学大臣から繰越承認を受けた利益は、「目的積立金」として中期計画に定める使途に従い次年度以降の教育・研究事業に使用することが可能となります。教育・研究の充実のために「目的積立金」を使用することで、学生をはじめ国民の皆様に利益が還元される仕組みとなっています。

▶ 例

入金時、負債計上

(B/S) 現金預金 100

運営費交付金債務 100 (B/S)

物品購入時、費用計上

(P/L) 費用 100

現金預金 100 (B/S)

決算時、収益計上

(B/S) 運営費交付金債務 100

運営費交付金収益 100 (P/L)

東京海洋大学基金について

▶ <https://www.kaiyodai.ac.jp/kikin/>



平成 23 年に「東京海洋大学基金」を設置し、皆様からいただいた貴重な寄附金を、優秀な学生への修学支援をはじめ、教育研究等の活動の推進を図るとともに教育研究環境の整備充実に活用させていただいております。

また、平成 28 年の税制改正に伴い、「修学支援事業基金」を創設し、優秀な学生が経済的理由で修学を断念することがないように、給付型の奨学金として支給させていただくとともに、令和 3 年度より学生(大学院生・学部生)やポスドク等、若手研究者を支援するため、「研究等支援基金」を設置しました。

令和 6 年度にいただいたご寄附は、次の事業の推進・整備を図るため有効に使わせていただきました。

令和 6 年度実績

- 学資支給事業(修学支援事業)
- 課外活動補助(サークル活動補助等)
- 育英基金(奨学金)
- 附属図書館整備充実(図書購入(電子書籍を含む))など
- 各学部修学支援事業等

令和 6 年度 東京海洋大学基金収支

【受入の部】 (単位:千円)		
区分	金額	備考
前年度繰越金※	734,919	
寄附金受入額※※	135,630	
受取利息	3,235	
合計	873,784	

※クラウドファンディングでの受入額を含む

※※「大山孝勇研究奨励基金」受入額 1 億円を含む

【支出の部】 (単位:千円)		
支援内容	金額	備考
学生の修学支援	15,688	学資支給事業、課外活動補助、育英基金 他
学術資料の収集・管理等	7,448	図書購入、明治丸関係技術指導等 他
その他※	2,797	基金実施経費、パンフレット作成 他
管理等経費	13,092	寄附金受入額の 10 %
小計	39,025	
次年度繰越額	834,759	
合計	873,784	

※クラウドファンディングに係る支出額を含む

校友会について



「東京海洋大学校友会」▶ <https://koyu.kaiyodai.ac.jp/>

平成 29 年度に、新たな学部として「海洋資源環境学部」を設置し、また各学部の改組再編を行い、国内における唯一の海洋系総合大学としてその体制をより強固なものとししました。これを機に、社会全体における東京海洋大学の存在をさらに強くアピールするため、全学的に在学生、卒業生、修了生、在学生・卒業生の保護者、教職員、各同窓団体等の新たな交流を活性化させ、大学との関係を緊密にし、連携を強化することにより、大学の発展に寄与することを目的とした、「東京海洋大学校友会」を発足させました。

校友会では SNS 機能、校友会メルマガ、限定動画配信、公認課外活動団体ポータルサイトなど様々な機能を備えた校友限定ホームページを公開しています。(登録及び会費は無料です。)

同窓会について

「一般社団法人 楽水会」▶ <http://rakusui.or.jp/>

楽水会は、水産業及び海洋に関する学術的進歩への貢献・支援とともに、東京海洋大学と学生の支援、加えて会員の資質向上及び親睦をはかることを目的として、東京海洋大学品川キャンパスの卒業生等を会員とする同窓会組織です。

「一般社団法人 海洋会」▶ <http://www.kaiyo-kai.com/>

海洋会は「海事に関する学術その他諸般の事項を調査研究しその発展に資するとともに、会員の親睦を図ること」を目的として、東京海洋大学越中島キャンパスの卒業生等を会員とする同窓会組織です。

大学の概要について

詳しい内容等については、下記 WEB サイトをご覧ください。

▶ 大学概要 <https://www.kaiyodai.ac.jp/overview/summary/media/index.html>
トップページ>東京海洋大学について>大学概要>動画・パンフレット

広報活動について

大学の最新ニュースは、公式 WEB サイトをご覧ください。

▶ <https://www.kaiyodai.ac.jp>
過去のプレスリリース・メディア情報:トップページ>東京海洋大学について>広報活動